２０２２年３月２７日　説教『主の変容』

高橋克樹牧師

聖書　出エジプト記２４章１２～１８節、マルコ福音書９章２～１０節

イエスがフィリポカイザリア地方に行かれた時、ご自分の死を予測されて、弟子たちに決定的な問いを発しました。先週の説教では、世間の評判がイエスのことをメシア到来に先立って、そのメシアを指し示す先駆的な存在としてみていたにもかかわらず、ペトロが的確なキリスト告白をする場面をとりあげました。南北に王国が分裂した後の北イスラエルのアハブ王と激しく対立した預言者エリヤの再来だという意見は、マラキ書３章２３～２４節に『見よ、わたしは大いなる恐るべき主の日（＝救い主到来の日）が来る前に、預言者エリヤをあなたたちに遣わす』とあるように、メシア到来に先立って預言者エリヤあるいはエリヤの霊をもった別の預言者が到来すると信じられていたからです。洗礼者ヨハネの再来という見方も、その文脈においてです。それまでイエスの言葉を聞いたり、奇跡の業を見てきた人々にとっても、イエスはメシアが到来することを予め告げるメッセンジャー以上ではなかったのです。それに対してペトロは信仰告白においてイエスが救い主＝キリストであるという正しい信仰告白を行ったのでした。

しかし、正しい信仰告白をしたからといって、信仰者としての正当性が保証されるというものではありません。キリスト告白をしながら、なお「わかっていない」自分を知り、わからないからこそ、本当にキリストが自分にとってどういう救い主なのかを理解しようと求め続けていくことが大切なのです。なぜなら、信仰の告白は本来キリストを信じている自分において、自分でも知らない神の領域があるという謙虚さへと導くものだからです。自分でも知らない神の領域というのは、神の御業が現わされている自分の人生に気づくことです。今日の変容物語に登場する三人の弟子は、このことを試されているのです。８章２９節でイエスが救い主であることがペトロの信仰告白によって確認されました。そして、本日のテキストでも９章７節でイエスが神の子であることが確認されていますが、この３人の弟子たちは相変わらず的外れな思考の持ち主のままなのです。

本日のテキストでもそうです。イエスが神の子であることを証明する顕現の目撃者として選ばれた３人の弟子であるペトロ、ヤコブ、ヨハネ。彼らは５章３７節でヤイロの娘の癒しを目撃した人物たちです。また、彼らはゲッセマネの苦悶の目撃者ともなりました（１４章３３節）。治癒物語と変容物語はイエスの神的な力と栄光を表わす特別な現象であるにもかかわらず、この３人はイエ

スに対する理解がまったく深められていないのです。ペトロはすでに８章３３節でイエスの十字架の苦難の必然性を否定して叱責されています。それが変容物語では山上に仮小屋を建てようという的外れな提案をしてしまうのです。そして、ヤコブとヨハネは間もなく、自分たちが人に仕えるよりも、この世的な偉大さに執着して、神の座を争う醜態をさらすことになります（１０章３５～３７節）。そして、この３人はゲッセマネの園でイエスが苦悶しているときに、彼と共に目を覚ましていることができなかったのです（１４章３３～４１節）。

本日のテキストでは、イエスと共にこの３人が高い山に登ったのですが、そこでイエスの姿が変わり、まばゆいばかりに輝く白い衣の姿は、イエスが天上の存在であるというしるしを現わしています。ここに登場する山、雲、神の声は出エジプト記２４章１５～１８節における神の顕現を想起させます。さて、当時のユダヤ教の伝承でモーセは死んでいませんでした。彼は埋葬された場所もわからないので（申命記３４章５～８節）、神の御前で生きていると信じられていたのです。また、エリヤも戦車に乗ったまま天に引き上げられている（列王記下２章１～１１節）ので、同じく神の御前で生きていると信じられていました。つまり、モーセとエリヤは天上で生きているとみなされていたのです。その２人とイエスが語り合っているのです。その３人に『仮小屋を三つ建てましょう』というペトロの提案は、少なくとも神と共に天上に住んでいるモーセとエリヤに対しては意味のないものです。その意味でペトロは正しい信仰告白をしていながら、自分でも知らない神の領域があることをこの変容物語は明らかにしています。

一行が山を下るときの対話では、話題は十字架の受難の必然性に及びます。個々での沈黙命令は沈黙を守る期間を復活までと限定しているので、イエスが復活することによってペトロを含めた弟子たちにすべてのことが明らかになることを示しています。これらのことを踏まえると、マルコ福音書の読者は、イエスの洗礼の際に聞いた神の声『あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者』（1章１１節）と9章7節の関連で、イエスがモーセやエリヤよりも偉大な存在であることを知ることになるのですが、同時に、そのような偉大な存在が苦難と死を通らなければ本当の栄光に入ることができないことを知るのです。つまり、変容物語は、福音書の顕現の場面の中でも、イエスと神の関係性について最も劇的な証拠を提示しているのです。にもかかわらず、イエスの苦難と死の必然性を弟子たちは悟ることができないのです！　神は、自分の愛する子を死なせるだけでなく、あろうことかその御子の死を敵の手によって成就させるのです。高挙して神の栄光に入るというプラスの面だけを見続けている弟子

たちの信仰理解の姿勢は、自分で信仰を持っていると思い込んでいる私たちの姿にも重なります。それはこの世の価値観の延長線上で神の国を見ているときに興ってしまうのです。

１２節以下のイエスの返答は、洗礼者ヨハネがエリヤであったことを示唆しています。

洗礼者ヨハネの死は、人の子を待ち受ける運命を指し示していますが、この洗礼者ヨハネの死もまた預言者の預言した神のご計画を成就するものだと理解されています。マルコ福音書記者は、信仰告白において十字架の現実を忘れないように読者に繰り返し示しています。しかし、一方では変容物語によって、イエスに対する私たちの信仰には天的な基盤があることも示しているのです。イエスの洗礼に際して神はイエスを『わたしの愛する子』と宣言しましたが、変容物語はそのことを再確認させています。同時に、モーセとエリヤの登場によって私たち信仰者は、イエスの死と復活が旧約聖書に記された神の救済物語の最終目標であることを知ることになるのです。モーセとエリヤを遣わされた神が、こののちイエスや弟子たちと共におられることを知るからです。

以前に大阪市長だった橋下さんの出自を扱った週刊朝日の記事が大問題になり、朝日新聞は橋下さんに謝罪し、連載も一回で打ち切りになりました。橋下さんは非差別部落出身の祖父を持つということを扱った記事です。週刊朝日の記者（すべて朝日新聞からの出向）が橋下さんの伝記を書くという嘘までついて役所や地域の人々に取材をしたわけです。橋下さんと朝日新聞の対立がそうさせたのかもしれませんが、このことは地上での偏見や差別をてこにして事柄を解決していこうとするものです。地上のことだけを見ている目は、思考や行動を曲げていきます。神の視点がないからです。同時に人生における苦難がどういう意味を持っているかを考える機会も失わせます。イエスが十字架と死という苦難を通して復活させられることは、神に対する信頼の基盤が必要であることを明らかにしています。神の子であるイエスが神のご計画によって十字架に架けられて死ぬわけです。自らの死を受け止める究極の苦しみを神の意志として受け入れるイエスの信仰の姿は、私たちが天国に召されるまで経験するこの世の苦難をどう受け止めて生きていくかが問われていることを示しています。けれども、イエスの十字架の死は、私たちのこの世での苦難をすべて担うためのものですから、私たちの苦難や苦しみが十字架に連なっているという恵みを示しているものでもあるのです。私たちの苦難や苦しみが神の恵みに直結していることに気づかされたとき、神の御業が現わされた自分の人生に感謝することへと導かれるのです。